

自閉スペクトラム傾向と「0 か 100 か」思考の関係を解明 ～不確実な状況への耐えにくさを介する可能性～

【本研究のポイント】

- ・ASD(自閉スペクトラム症)^{注1)}において、不確実な状況への耐えにくさ(不確かさ不耐性)^{注2)}が「0 か100か」思考(二分的思考)^{注3)}を生じさせる仮説について、実証的な研究はこれまでなかった。
- ・非臨床群^{注4)}の大学生・一般成人を対象とした質問紙調査により、自閉スペクトラム傾向の高い方における二分的思考傾向が、不確かさ不耐性を介して生じる可能性があることを明らかにした。
- ・本研究成果は、ASDにおける認知特性の理解やその特性に配慮した環境の整備や支援の基盤に役立つことが期待される。

【研究概要】

国立大学法人東海国立大学機構 名古屋大学大学院情報学研究科の平井 真洋 准教授は情報学部学部生(当時)の鈴木 暖生さんとともに、大学生・一般成人を対象とした研究により、自閉スペクトラム傾向の高さは不確かさ不耐性を媒介して二分的思考に至りやすいことを明らかにしました。

医学的な診断名である自閉スペクトラム症(ASD)は神経発達症^{注5)}の一つで、ASDがある方における認知特性の背景にあるメカニズムについては十分明らかにされていないのが現状です。近年 ASD がある方の認知特性について、不確かさ不耐性が二分的思考法と関連する可能性を示すモデルが提案されているものの、実証的なエビデンスは得られていませんでした。

本研究では、自閉スペクトラム症傾向と不確かさ不耐性、二分的思考がどのような関係にあるのかを、非臨床群の大学生・一般成人を対象とした質問紙調査により検討しました。その結果、自閉スペクトラム傾向の高さが不確かさ不耐性を介して、二分的な思考を生じさせる可能性を見出しました。

今回のような研究の進展により、ASDがある方の認知特性を考慮した環境づくりや支援を行う基盤として、その認知特性の背後にある要因の特定や、認知特性が生じるメカニズムの解明に役立つことが期待されます。

本研究成果は、2023年8月28日付学術雑誌『Scientific Reports』に掲載されました。

【研究背景と内容】

近年、ASDがある方の認知モデルが提案されています(Starkら2021)。このモデルでは、ASDがある方では、不確かさ不耐性を媒介として二分的思考に至るのではないかと仮定されていますが、実証的なエビデンスはありませんでした。

そこで本研究では、それぞれの特性を評価する3つの質問紙(自閉スペクトラム指数、The short Intolerance of Uncertainty Scale 日本語版、二分法的思考尺度)を用いることにより、提案されたモデルの妥当性について検討しました。

まず、予備調査として151名の成人(非臨床群の大学生)を対象とした質問紙調査により、自閉スペクトラム傾向の高さは不確かさ不耐性を媒介して二分的思考に至ることを確認しました。この予備調査の結果を受けて、非臨床群の大学生と同年代(20-22歳の男女)の様々な職種の方々500名(非臨床群の一般成人)を対象とした本調査においても予備調査と同様の傾向を認めました。

今回の研究では、非臨床群の大学生・一般成人を対象とした研究であるものの、Starkら(2021)の認知モデルの妥当性を示す結果を得ました。

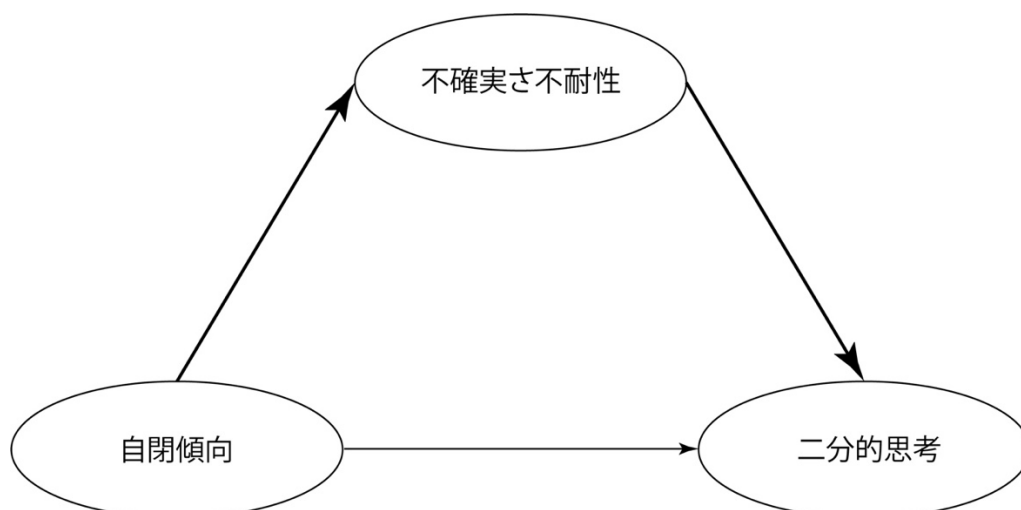


図1. 本研究により明らかになった自閉傾向と二分的思考の関係

【成果の意義】

今回の研究では、Starkら(2021)¹が提案したASDがある方の認知モデルを質問紙調査により実証的に明らかにすることを試みました。ASD特性は臨床群・非臨床群においても連続的に現れるため、今回はASD非臨床群を対象としました。その結果、提案モデルの想定と一致し、自閉スペクトラム傾向の高さが不確かさ不耐性を媒介して二分的思考に至る可能性を見出しました。この可能性についてStarkらは「自閉スペクトラムがある方は、不確かさの不快感を回避し、行き詰まりを感じないようにするために、不確実な真実の状態を二者択一の結果に帰着させる傾向がある。この確実と感じられる「0か

100 か」の結果によって、不安を軽減しているかもしれない。よって、「0 か 100 か」の思考は、意識的であれ無意識的であれ、不確実性とそれに伴う不安を軽減するための方略かもしれない。」と推測しています。

今後、ASD がある方の認知特性を説明する既存の理論と今回の研究結果がどのように関連するのかについても明らかにしていく必要があります。今回の研究は年齢が限定された成人を対象に、質問紙調査でアプローチしました。今後は認知神経科学的手法を用い、ASD があるお子さんを対象とした研究を進めていくことにより、その背後にある神経メカニズム、さらにはその発達について解明していくことが期待されます。

本研究は科研費(21K18554)の支援のもとで行われたものです。

【用語説明】

注 1)ASD(自閉スペクトラム症):

神経発達症の一つで、アメリカ精神医学会の診断基準(DSM-5)では、社会的コミュニケーション・対人相互作用における困難さ、行動・興味または活動の限定された反復的な様式など認められる場合に診断される。

<https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/heart/k-03-005.html>

注 2)不確実さ不耐性:

不確実さや不確実さの影響に対する否定的な信念体系に由来する素因的特性(Dugas & Robichaud, 2007, 竹林ら 2012)。

注 3)二分的思考:

物事を「白か黒か」「善か悪か」「0 か 100 か」のように捉える思考傾向(Oshio, 2009)。

注 4)非臨床群:

特定の医学的な診断名(今回は自閉スペクトラム症)をもたないと想定される方。

注 5)神経発達症:

発達障害と記述することもある。アメリカ精神医学会の診断基準(DSM-5)では、発達期に発症する一群の疾患を指す。この疾患は通常、発達の初期、多くの場合は小学校入学前に現れ、個人的、社会的、学業的、職業的機能の障害をもたらす発達の状態により特徴づけられる。

【引用文献】

1. Stark, E., Stacey, J., Mandy, W., Kringelbach, M.L., and Happe, F. (2021). Autistic cognition: Charting routes to anxiety. *Trends Cogn. Sci.* 25, 571-581. 10.1016/j.tics.2021.03.014.

【論文情報】

雑誌名:Scientific Reports

論文タイトル: Autistic traits associated with dichotomic thinking mediated by intolerance of uncertainty

著者:Noi Suzuki & Masahiro Hirai

DOI: 10.1038/s41598-023-41164-8

URL: <https://www.nature.com/articles/s41598-023-41164-8>